特集にあたって
——中国ナショナリズムをいかに論じるのか——

川尻文彦

I

はなはだ僭越ながら，「立場」上，以下の拙い文章を書かせていただきたい。

中国のナショナリズムにまつわる問題は多岐にわたり，しかも巨大であり，それらのすべてを扱う能力は私にはない。今回の会議の趣旨に関連して，中国のナショナリズムを論じるに当たって考慮すべきと思われることがらについて若干触れたい。

「20 世紀中国史再考」の企画にあたり，「20 世紀」，「20 世紀中国（史）」，「再考」それぞれの意味するところについて考えておかなくてはならないであろう。

「20 世紀」とは通例，1901 年から 2000 年までの百年間を指す。世紀末あるいは世紀初にあたって前世紀の 100 年間を批判的であれ肯定的であれ，「回顧」，「総括」し，新しい世紀の展望を描くことはこれまでにも行われてきたことで珍しいことではない。×× 01 年から×× 00 年までを機械的に区切っただけの 100 年間ではあるが，単に西暦で 100 年間を切り取っただけではない何らかの「意味」を探ろうということなのである。

ヨーロッパ史やヨーロッパ文学の分野では「世紀末文学」や「世紀末芸術」などの語で代表されるムーブメントがかつて流行し，各方面に影響を与えたことはよく知られている。

しかし，舞台を東アジアの日本や中国に限ってみても，1900 年を前後するさきの世紀交替期にあたって，そのような動きは存在した。たとえば，明治時代を代表する言論誌であった『太陽』は「19 世紀特集号」（第 6 刊第 8 号（臨時増刊），明治三十三年（1900 年）六月十五日）を刊行し，さまざまな角度から 19 世紀の世界史を総括している。

参考までにその目次の一部を掲げれば，大隈重信「未来両世紀に於ける世界列国を日本との位置」，加藤弘之「十九世紀に於ける思想の変遷」，島田三郎「十九世紀の思想」，井上圓了「十九世紀における宗教」，井口省吾「十九世紀における陸軍の進歩」，木村浩吉「十九世紀における海軍の進歩」，井上哲次郎「十九世紀の哲学」，曾我祐準「将来の世紀に於ける列国勢力の消長予想」，田口卯吉「十九世紀の大勢及未来」，渡辺国武「近世の社会問題」等。加藤弘之「十九世紀に於ける思想の変遷」は梁啓超により『清議報』に訳載され

ている。

『太陽』雑誌はその扱うテーマはきわめて広く，また雑駁であり，官民を問わず，さまざまな論客，学者，政治家が寄稿している[1)]。そこでは全体として，「文明」と「野蛮」，「帝国主義」や「民族帝国主義」など，西洋文明を「進化」の最高段階であるとする「進化史観」が色濃く投影されている。「後発国」であった日本が「帝国列強」に伍していく気負いを感じることができる。

幸徳秋水は『廿世紀之怪物帝国主義』（1901 年）で，二十世紀に「帝国主義」の時代の到来を予言し，レーニン，ホブスンに先駆けて複雑な帝国主義の構造をえぐり出し喝破した。また注目すべきは，幸徳秋水は，「十九世紀」や「二十世紀」にまつわる論説をこのほかにも発表していることである。幸徳秋水「十九世紀と二十世紀」（『日本人』百二十九号，明治三十三年十二月二十日）や「二十世紀を迎ふ」（『万朝報』明治三十四年一月一日）などである[2)]。つまり『廿世紀之怪物帝国主義』は彼の一連の「十九世紀」，「二十世紀」認識の集大成であるといえる。大略，「十九世紀自由主義は，能く政権の不平等を打破せりと雖も，未だ経済的不平等を打破する能はず，自由競争の制は却て之を激成せるが為めに，……［下層労働者の運動をひきおこし］資本家彼等自身も亦其相互の競争の弊に堪へずして，資本合同の必要を感じ，所謂ツラストを組成して海外に向て市場を求め，彼帝国主義と称する政治家と提携し，国民的膨張を試むるに至れり[3)]」とする。乱暴に要約すれば，幸徳は十九世紀自由主義から二〇世紀帝国主義への移行を見出す。

中国知識人の梁啓超は，当時日本に亡命中であり，そのような日本の世紀交替期の雰囲気を貪欲に吸収し，中国へと導入した。梁啓超が，前述の幸徳秋水『廿世紀之怪物帝国主義』に大きな影響を受けていることは梁啓超の残したいくつかの文章から知られる。

梁啓超の「東籍月旦」（1901 年）は中国人が読むべき日本語の書籍を梁啓超の立場から選択的に紹介したものである。そこには上記『太陽』の「19 世紀特集号」も掲載されている。それよりも何よりも『新民叢報』（1902 年創刊）に掲載され，梁啓超がもっとも影響力のあった時期の政論群が，まさしく明治日本の知的雰囲気の影響が濃厚であることである。「新民説」（1902 年）しかり「国家思想変遷異同論」（1901 年）しかり，梁啓超なりの「19 世紀史」の「総括」が色濃く反映している。

もちろん梁啓超は政論家であり，思想家であり，つねに圧倒的存在であった清朝に向き合い，現実政治の渦中にいた人物である。今日の私たち研究者とは同日に論じることはできない。しかし今日を生きる私たちも在野の歴史家として前世紀の 100 年を科学的，学問

---

1) 鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』京都：思文閣出版，2001 年。現時点でもっとも包括的な『太陽』の共同研究であるが，「世紀交替」にまつわる論考は採録されていないようである。

2) いずれも，幸徳秋水全集編集委員会編『幸徳秋水全集』日本図書センター，1982 年，に収録。

3) 幸徳秋水「十九世紀と二十世紀」，『全集』第一巻，pp. 337- 338 頁。

的な態度で分析，検討することは意義あることであると考えられる。

次に「20 世紀中国」あるいは「20 世紀中国史」という言い方について検討してみたい。

「20 世紀」を総括する試みは近年，さまざまに行われてきている[4)]。分析視角，歴史観などによってその総括の仕方はさまざまとしかいいようがないことではある。

文明史的な視野からは，20 世紀半ばを過ぎたばかりの 1964 年にすでに『20 世紀の意味』なる著書を出したアメリカの経済学者ケネス・ボールディングが言うように，約 5000 年前にはじまる「文明前社会」から「文明社会」への「第一の大転換期」を経て，20 世紀を「文明後社会」への「第二の大転換期」とみなした[5)]。

このような壮大な「文明史」的な視点に立たなくとも，私たちの常識的な「世界史」理解から，「20 世紀」を「戦争」，「社会主義」と「資本主義」の「イデオロギー（対立）」，「アメリカ」などで特徴づけることも可能であろう。

またある歴史家は 20 世紀とはヨーロッパを中心に世界を考えることができなくなったという意味で，「世界史」なるものが発生した時代であるとし，20 世紀のはじまりとともに世界戦争が勃発し，世界政治や世界的世論が登場したことを指摘している[6)]。

エリック・ホブズボームは 20 世紀を「戦争と革命の時代」であると総括した[7)]。彼の歴史家としての知名度もあり，彼の「20 世紀」総括は多くの研究者に言及されている。なるほどロシア革命に始まり，中国革命，キューバ革命などをまのあたりにし，20 世紀を通じて「革命」の時代であったことを印象づけられる。

「20 世紀」の舞台を「中国」あるいは「中国史」に限ってみるならば，「革命」に彩られたとの感がなおさら強い。中国の人々が「革命」に魅せられ，夢を託したことは事実である。辛亥革命，国民革命，新中国の成立，文化大革命にいたるまで中国はこの 100 年「革命」と名のつくものに翻弄されてきた。また「革命」の「成功」により成立した政権が今日まで続いているため，「革命」を「正当化」しようという「革命史観」が強い影響力をもっていた。無論，今日では「革命」の過程を追うことが，いわゆる「革命史観」に直結するとは到底いえないのは事実だが。しかし，「革命」では拾いきれない歴史を描く，それが「再考」の意味のひとつでもある。

これまで日本で「20 世紀中国」と題した著作はいくつか刊行されている。また，国内・

---

4) 手元にあるものでは，佐伯啓思『20 世紀とは何だったのか――「西欧近代」の帰結』PHP 新書，2004 年，野田宣雄『二十世紀をどう見るか』文春新書，1998 年，等。

5) ケネス・ボールディング著，清水幾太郎訳『20 世紀の意味：偉大なる転換』岩波新書，1967 年，E. Kenneth Boulding, *The Image:Knowledge in Life and Society*, University of Michigan Press, 1961.

6) G・バラクラフ著，中村英勝・中村妙子訳『現代史序説』岩波書店，1971 年。Geoffrey Barraclough, *An Introduction to Contemporary History*, New York:Basic Books, 1964.

7) エリック・ホブズボーム著，河合秀和訳『20 世紀の歴史：極端な時代』三省堂，1996 年，E. J. Hobsbawn, *Age of Extremes;the Short Twentieth Century 1914-1991*, London, 1994.

外で「20 世紀中国」を冠した学会，研究会の類も多い。

その代表例が姫田光義ほか『中国 20 世紀史』（東京大学出版会，1993 年）である。私には，この本は，政治史中心の叙述を脱却し，社会や文化にも目配りをした点に特色があるように見える。しかし，これを含め，「20 世紀中国史」という枠組みそのものに対する方法論的な自覚や分析視角を鮮明にしたものはでていないように思われる。

実は中国大陸を含めた国外でも事情は同じである。最近，しばしば見られるのは，20 世紀中国史を「現代化」の過程であるとする見方である[8)]。20 世紀の出発点である「新洋務」（二十世紀最初の年である 1901 年に「清末新政（New Policy）」が始まったことはなんとも象徴的である）も「現代化」の過程のなかに含まれる。「脱イデオロギー」のニュートラルな史観を提示，という積極的な意義がある。

また前近代以降の中国社会の構造変動を「新陳代謝」という観点からとらえる陳旭麓の史観も反響をよんでいる[9)]。

つまり「20 世紀中国史」を理解する視角は研究者の数だけ存在する。唯一絶対のものは存在しないのである。

Ⅱ

では私たちは「20 世紀中国史」をいかなる方法で「再考」するのか？

さしあたり，ナショナリズム（nationalism）という重要な概念をとりあげることにする。ナショナリズムが中国の近現代史において重要な役割を担ったことは明らかであるからである。

アヘン戦争を中国近代史の「起点」とみなす今日の中国における歴史叙述が，「帝国主義」の侵略に対する中国の「抵抗」を重視したナショナリズム的な色彩の濃いものであることは一目瞭然である。また，「中国革命」の実現をある種のナショナリズムのあらわれとみる見方はおそらく間違ってはいまい[10)]。

そもそも，ナショナリズムとは何か？　実はこれは難問であり，西洋史や西洋政治思想史の分野でもいまだ決着のついていない問題である。ここ百年間，今日にいたるまで様々な人々が様々な「定義」でナショナリズムを論じている[11)]。汗牛充棟，数限りないといっ

---

8) 許紀霖・陳達凱主編『中国現代化史』（第一巻，1800～1949）上海三聯書店，1995 年。

9) 陳旭麓『近代中国社会的新陳代謝』上海人民出版社，1992 年。

10) C・ジョンソン著，田中文蔵訳『中国革命の源流――中国農民の成長と共産政権』弘文堂新社，1967 年。Chalmers A. Johnson, *Peasant Nationalism and Communist Power:The Emergence of Revolutinary China 1937-45*, Stanford University Press, 1962.

11) その一端は，大澤真幸編『ナショナリズム論の名著 50』平凡社，2002 年。

てもよい。

さらにナショナリズムを東アジア史の文脈で考える場合，西洋由来の「概念」の「翻訳」という問題がさらに加わる。

つまりナショナリズムをどのように日本語，あるいは中国語に翻訳するのかという問題である。このことは文献史料を重視する歴史学の場合，非常に困難な問題をつきつける。ナショナリズムにかかわる記述を探索しようとする時，どのようなことばを鍵にすればよいのか逡巡させるのである。

ナショナリズムは通例，日本語では「民族主義」,「国民主義」,「愛国主義」あるいは「国粋主義」と訳される[12)]。ナショナリズムは一般には「ネーション」への「愛着」(attachment) と解されるが,「ネーション」の「訳語」としては「民族」,「国民」,「種族」などが一応，想定される。では私たちは「民族」,「国民」,「種族」あるいは「愛国」などを手がかりに史料を読みこめばすむ話しなのであろうか。

周知の通り, 漢字語には前近代以来の用法, 含意が抜きがたくしみついており, たとえば, ネーションを民族と言い換えた途端,「民族」という言葉にそれまで含まれていたニュアンスがいやおうなく出てきてしまうのである。それゆえナショナリズムを探求する場合，前述の「民族主義」「国民主義」「愛国主義」などの言葉を追えばすむという話にはならない。

さらにそこには日本製漢語と（中国製）漢語という問題も介在する。この両者は清末以来，互いに「往還」しつつも,「断絶」面も有している。

気の遠くなるような作業であるが，ナショナリズムの問題を考えるに当たって，まずはひとつひとつの「概念」を丹念に探ってみるという作業から逃げることはできない。既存の研究に依拠しながら簡単に振り返ってみたい。

ネーション（nation）はフランス革命時期に誕生したものだが，1880 年代，志賀重昂ら日本の国粋主義者によって当時はあまり日本語として一般的ではなかった「民族」と訳された。当時の日本人にとって「国民」と「民族」は別のニュアンスをもつ単語であることはすでに認識されていた。しかし日本人の「国粋」の役割を重視する彼らの立場からは日本という国の「国民」を作るために「民族」をあえて持ち上げたのである。

20 世紀初頭の在日中国人たちが，中国語としてはこなれていない「民族」という単語に日本で触れ，これを積極的受け入れたのは，彼らが基本的には日本の民族主義思想に共鳴していたからである。「民族」を通じて「国民」を喚起し,「民族」と「国家」が一致する国家――nation state「国民」の観点からいえば「国民国家」,「民族」の観点からいえば「民族国家」――を作り上げることを目指した[13)]。まさしく梁啓超しかり孫文しかりである。

[12)] 鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』平凡社新書，2005 年。

[13)] 以上の叙述は，王柯「「民族」，近代日本から来た誤解――国民国家言説の起源」,『20 世紀中国の国家建設と「民族」』東京大学出版会，2006 年，所収，に依拠している。

言葉遊びのような錯綜した論理であるが，異民族王朝の支配下におけるナショナリズムのあり方をはからずも示しているといえよう。つまりネーションの実現を目指すナショナリズムにとって，異民族王朝支配下の現実を如何に捉えるのか――章炳麟ら漢族ナショナリストは王朝打倒に傾いた――が，大きな課題になったのである。そもそも支配階層である満州人は「中国」のネーションの範疇のなかに入るのか？　それゆえネーションとは本来は別の次元の話であるはずの「種族」あるいは「人種」（race）観念が中国ナショナリズムの生起にあたって重要な意味を持ってくるのである[14)]。

「概念」の歴史をたどってみると「すべてはギリシア・ローマにある」（清末に流行した「すべては三代にある」の附会論と相似する）的な議論に陥りがちである。たしかに「民主」にせよ「自由」にせよギリシアやローマに見出すことは「不可能ではない」。

このことを大澤真幸は簡潔に紹介している。

「ネーション（国民・民族）やナショナリズムという現象がいつ始まったのかという問いは，ナショナリズム論のもっとも重要な争点の一つである。多くの学者は，ネーションとナショナリズムは近代的な現象であり，その端緒を一八世紀の後期よりも深くは遡ることはできないと見なしている（近代主義）。が，逆に，たいていのナショナリストの自己認定と同様に，ネーションは，あるいはその萌芽となるべき共同体は，古代にはすでに存在していた，と見なす学者もいる（原初主義）。[15)]」

つまり「近代主義」と「原初主義」の二つの立場がありえる。大澤氏自身は「近代主義」に傾いているというのだが。

ここで私が強調しなくてはいけないのは，中国のナショナリズムは明確に清末にはじまるということである。

その証左をひとつ挙げれば，岳飛は「ナショナリストといえるのか？」という問いがある。岳飛（1103～1141）とは，南宋の武将，字は鵬挙。河南湯陰の人。高宗に仕え，江淮の賊を討伐し，「精忠岳飛」と記した旗を受けた。金軍をたびたび破って功をたてたが，佞臣秦檜により金との和平が進められるなかで，主戦派の筆頭であり，民衆の絶大な人気を持った岳飛は秦檜にとって危険な存在であり，1141 年，無実の罪を着せて誅殺された。それゆえ，中国では「救国の英雄」とされてきた。

結論から言えば，岳飛は南宋に「忠」ではあったのかもしれないが，ナショナリストとはいえない。そもそもナショナリズムが生起した清末になってはじめて彼がナショナリストとして「顕彰」されるようになったのである[16)]。つまり，岳飛がナショナリストとして「顕彰」されるのも，清末以降のナショナリズムの興起の結果なのである。

[14)] 坂元ひろ子「中国史上の人種概念をめぐって」，竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う――西洋的パラダイムを超えて』人文書院，2005 年。

[15)] 大澤真幸「編者まえがき」，前掲『ナショナリズム論の名著 50』，3 頁。

清末における「瓜分」の危機感が「中国」の自己意識を刺激し,「中国」の「自画像」(ネーション)を「模索」させたのである。その「模索」の過程はさまざまであり,そのことは中国ナショナリズムの多様なあらわれとかかわっている[17)]。

いずれにせよ,「西洋の衝撃」の後はじめてこのような事態が生じたと言ってもよい。このような清末以降の「ナショナリズム」の噴出は,希代のジャーナリスト梁啓超の数多くの文章に典型例としてあらわれている。

つまり,ナショナリズムは中国において「二十世紀」的現象であると断言できる。清末を扱う茂木氏の一連の仕事もその系譜なかに連なるのである[18)]。

Ⅲ

ナショナリズムという西洋の「価値」がいかに中国に受容され,「本土化」し(あるいは,せず),政治,経済,社会,文化面で歴史の原動力になり,中国史の諸相を彩ることになったのか。単なる「西力東漸」,「西洋の衝撃・中国の反応」ではなく,中国近現代史の「内在的」な進展をとらえるのに有効な方法であると考えられる。

そもそも,ナショナリズムは学問的に有効な分析概念か? ナショナリズムを取り上げることにより何をいかに解明しようとするのか,が問われるべきであろう。

1980年代以降,急速に進展したグローバル化の趨勢がナショナリズムへの注目を増したという面はたしかにある。この間,世界中で膨大な量のナショナリズムに関する著作が出され,ナショナリズム研究ブームとでもいうべき現象が現れた。また米・ソのイデオロギー対立の終焉が人々にネーションに関する「記憶」をあらためて呼びおこさせたともいえる。

ナショナリズムは「思想」であり「運動」であり,暗々裏に人々の考えや行動を規定する「イデオロギー」でもある。その影響力の大きさは「20世紀の妖怪」とでもいうべきものである。ナショナリズムに着目することは歴史のダイナミズムの一面を浮き彫りにしてくれることを期待できる。

ただその際にナショナリズムを単独でみるだけではなく,隣接の諸概念(たとえば,社会主義や自由主義もその有力な候補であろう)との関係性の中で中国のナショナリズムを把握する必要があるように思われる。

---

16) 佐藤慎一「中国に宋近世説は存在したか?——清末知識人の宋代イメージ」,『中国——社会と文化』第20号,中国社会文化学会,2005年。

17) その一端は,佐藤慎一「儒教とナショナリズム」,『中国——社会と文化』第4号,東大中国学会,1996年が描写している。

18) 茂木敏夫「国民国家の建設と内国植民地——中国辺疆の「解放」」(宮嶋博史ほか編『植民地近代の視座——朝鮮と日本』岩波書店,2004年)ほか。

その点において，ナショナリズムを民主主義（デモクラシー）の進展において把握しようとした西村成雄の中国ナショナリズム論（『中国ナショナリズムと民主主義――二〇世紀中国政治史の新たな視界』研文出版，1991 年）は野心的であった。西村氏の研究にはこれまでさまざまな言及がなされてきたので，いまさら多言を要しない。ただこれまで以上に研究を深化させるため，今後もより深い探求が必要となるであろうと思われる。

西村氏の「ナショナリズムと民主主義の「内在的」な相互浸透」の視座は，おもに国民党・国民政府に重点が置かれており，国民党政権のナショナリズムとその政治的民主主義の側面を最大限に汲みあげることで，新中国建国の時点に接続させ，さらに現体制の民主化や両岸統一問題をも展望しようとするものである。その際，西村氏によれば「国民国家」形成に決定的に重要なのは，共産党の根拠地権力を含めた「地域権力」が，国民政府を中央政府として認めることである[19]。

ただ近現代中国におけるナショナリズムにせよ，デモクラシーにせよ，それぞれ多様な含意をはらみ，多様な現れ方をすることを鑑みると，私は別の叙述の可能性を模索してみたくなるのである。

その意味で今回の三人の論客のすこぶる魅力的な問題提起――それぞれ扱う時期や学問的な方法論が異なる――をじっくりとかみしめ，今後の課題にしたい気持ちである。

（かわじりふみひこ・帝塚山学院大学）

---

[19] 砂山幸雄「（書評）西村成雄『中国ナショナリズムと民主主義――二〇世紀中国政治史の新たな視界』（研文出版）」『中国研究月報』1992 年 8 月，pp. 36- 38。